

精神科入院者への権利擁護活動に関する 経験交流会・事例検討会

特定非営利活動法人 大阪精神医療人権センター
〒530-0047 大阪市北区西天満 5-9-5 谷山ビル 9 階

助成事業の概要

本事業は、精神科病院に入院する人の人権擁護を担う市民アドボケイトの育成と支援を目的として実施した。入院者との面会活動に必要な知識や姿勢、対応力の向上を図るとともに、活動上の不安や課題を共有し、継続的な支援体制の強化を目指した。

事業は 2025 年 6 月 14 日および 12 月 6 日の 2 回、エル・おおさかにて実施した。午前は事例検討会として、実際の相談事例をもとにロールプレイングを行い、初回面会時の配慮点、退院意思の表明が難しい背景、医療者との関係調整などについて検討した。午後は面会活動経験交流会を開催し、「面会活動の手引き」を活用しながら、参加者同士が経験や悩みを共有し、個人情報保護に関する確認も行った。

あわせて、本事業の内容をまとめた A3 両面のリーフレットを作成し、事例検討の要点や交流会の様子を伝える報告書とした。参加できなかった活動参加者への共有にとどまらず、新たな参加希望者にとっても有用な資料として活用することで、面会活動の基盤強化につなげることを目的としている。

事業の成果

本事業は、精神科病院における面会活動の質の向上と、担い手同士の学び合いを目的として、事例検討会および面会活動経験交流会を計画的に実施した。ロールプレイングを取り入れた事例検討

会では、入院者役をファシリテーターが担い、参加者がアドボケイト役・観察者として関わることで、実際の面会場面を具体的に想像しながら検討を行うことができた。参加者からは、「実際にやってみて初めて気づく点が多かった」「他者の視点や声かけの工夫が参考になった」といった声が寄せられ、目的である実践力の向上という点で一定の成果が得られた。

また、経験交流会では、「面会活動の手引き」を共通資料として活用し、日頃感じている不安や迷い、困りごとを率直に共有する場を設けた。アンケートでは、「一人で抱えていたモヤモヤを言語化できた」「同じ悩みを持つ仲間がいると分かり安心した」「困っていることは、いつもできる（それはもちろん意味があることですが）ので、それにプラスして、こうやってうまくいったという工夫みたいなものを出し合えばいいかと思います」「活動に参加されている一人一人がいろいろな悩み、疑問を持ちながら前向きに取り組んでおられる姿が分かってよかったです」といった感想があり、参加者同士の相互支援や継続的なつながりの重要性が再確認された。特に、経験年数の異なる参加者が混在することで、実践知の継承や、初心者への具体的な助言が自然に行われる点は、本事業の大きな成果である。

一方で課題として、新型コロナウイルス感染拡大の際に、活動ができなくなり、継続して活動をされていた方や、活動ができなくなる前に養成した面会ボランティアなど潜在的な活動参加者の拡大が必要である。本助成事業で作成した報告書を活用し、再度の活動参加促進をさらに進めていく

必要がある。

事例検討の内容を日常の面会活動にどのように継続的に生かしていくかという点が挙げられた。今後は、参加しやすい広報方法の検討や、振り返り内容の共有方法の工夫を行いながら、学びが単発で終わらない仕組みづくりが求められる。本事業を通じて得られた知見を今後の活動に反映し、より質の高い面会活動の実現につなげていきたい。

■ 成果の広報・公表

本事業の成果については、事例検討会・経験交流会の内容や参加者の声をまとめたリーフレットを作成し、広報・公表を行った。本リーフレットは、事業の目的や実施概要、ロールプレイを中心とした事例検討の特徴、参加者の学びや気づきが具体的に伝わる構成とし、面会活動の意義や実践の様子を可視化する広報ツールとして活用している。

大阪精神医療人権センターでは、今回の事例検討会・経験交流会に参加した面会ボランティアに対して成果の共有を行うとともに、参加がなかった面会ボランティアにも配布・案内し、活動内容や学びの広がり伝えていく。加えて、当センターの会員に向けても本事業の成果として発信し、団体全体での理解促進と関心喚起を図った。

今後は、本リーフレットを面会ボランティア活動の周知や新たな担い手への案内資料としても活用する予定であり、事業成果を一過性のものとせず、継続的な活動の充実と広がりにつなげていくことが可能であると考えている。

■ 今後の展開

本事業を通じて、架空事例に基づいたロールプレイを中心とした事例検討や、経験が浅い面会ボ

ランティア、経験豊富な面会ボランティアの経験交流の場が、暗黙知となっている経験を言語化し、経験知として蓄積される機会であった。さらに、面会ボランティアの実践力向上や不安の軽減、相互支援の形成に有効であることが確認できた。一方で、参加者が限られることや、学びの内容を日常の面会活動にどのように継続的に生かしていくかといった課題も明らかとなった。

今後は、事例検討会・経験交流会を定期的な学びの機会として位置づけ、継続開催を図るとともに、参加しやすい広報方法や開催形態について検討を進める。また、事例や議論のポイントを整理した資料を共有し、参加できなかったボランティアにも学びが届く仕組みづくりを行う。

さらに、今回作成した広報ツールを活用し、面会ボランティア活動の意義や具体的な役割を対外的にも発信することで、新たな担い手の確保や活動の理解促進につなげていきたい。助成事業で得られた成果を基盤として、面会活動全体の質の向上と持続的な発展を目指す。